

Surgical management of prepubertal testicular tumors :
A 30-year study in our institution

西尾 英紀（名古屋市立大学大学院医学研究科 小児泌尿器科学分野）

この度は、大変栄誉ある優秀論文賞を頂きまして、誠にありがとうございます。

本論文では、1987年から2020年までの約30年間に当院で手術加療を行った14歳未満の精巣腫瘍17症例をレトロスペクティブに検討し、高位精巣摘除術と比較して精巣温存手術を選択した症例で腫瘍サイズが小さかったこと、また2005年以前と比較して2005年以降の症例で精巣温存手術を選択した頻度が高かったことを報告しました。

小児に発生する精巣腫瘍は、思春期以降に発生した精巣腫瘍と比較して、良性腫瘍の割合が高く、組織学的に単一の形態を示すことが多いとされます。したがって、精巣腫瘍に対する標準術式である高位精巣摘除術を、成人例と同様に小児例に対して行うことは、制癌や精巣温存の観点でオーバートリートメントになる場合があり得ると思われま

す。近年の超音波検査装置の進歩によって、良性腫瘍の特徴である halo sign を描出しやすくなり、また小径腫瘍であっても腫瘍内部の血流の有無を評価しやすくなるなど、術前に良性腫瘍と判断することが可能となりました。さらに術前に腫瘍マーカーを測定し、術中迅速病理診断を行うことにより、悪性腫瘍を危惧して高位精巣摘除術を選択せざるを得ない状況から、精巣温存手術をさらに選択しやすくなっています。

精巣腫瘍は決して高頻度の小児泌尿器科疾患ではありませんが、一例一例を大切に蓄積し、今後の精巣腫瘍患者さんに、安全で低侵襲な治療を提供して参りたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。